

特集 2 : Clinical and Experimental Nephrology (CEN) の歩み

## CEN 発刊の経緯

今井 正

### はじめに

日本腎臓学会が発行する英文誌である「Clinical and Experimental Nephrology (CEN)」が発刊されて 10 年たった。このたび、CEN は Scientific Citation Index の対象雑誌として正式に承認された。これは、この雑誌が国際的な評価の対象としてのスタートラインに立ったことを意味する。そこでこの機会に、CEN の創刊前後の事情を簡単に振り返ってみたい。

### 日本腎臓学会誌の国際化へ向けての歩み

日本腎臓学会は 1959 年に日本循環器学会から独立して設立された。これと期を一にして日本腎臓学会誌が発行された。このときの英文名は Japanese Journal of Renology (JJR) であった。しかし翌年には The Japanese Journal of Nephrology (JJN) という英文名に変更された。これは、世界に先駆けて初めて Nephrology という用語を用いたという意味で画期的なことであった。

その後しばらくの間、掲載論文は原則としてすべて日本語表記であった。しかしながら、1980 年から論文の図表についてはすべて英文とすることが投稿規程に加えられた。これは、せめて図表のデータだけでも国際的に通用する情報として発信しようと意図したものである。さらに、翌年からは abstract も英文とすることが決定された。

その後、英文の論文が邦文の論文と混在して掲載されるようになった。しかし、英文の原著論文の投稿数が次第に多くなったため、1984 年から 1992 年にかけて、英文論文のみをまとめた号が年間 2~3

号発行されるようになった。1993~1994 年には年間 4 号の英文号を発行し、邦文号と区別するために英文号の表紙のデザインを変えた(図 1)。これが現在の CEN の先駆けとなっている。ただし、雑誌名は「The Japanese Journal of Nephrology」のままであった。

1984 年から 1994 年にかけて掲載された英文原著論文数の推移を図 2 に示す。1984 年から 1991 年までは 22~30 編程度で推移しているが、1992 年以後増加し、1993、1994 年は特に多くなっている。

1995 年は英文誌発行へ向けての準備段階として、雑誌のサイズを B5 判から A4 判に変更した。また、引用文献リストの形式をいわゆる Vancouver 方式に変更、統一することにした。Vancouver 方式というのは、1970 年 Vancouver において開催された国際編集者会議において採択された文献引用の標準的な方式である。その概要は以下の通りである。  
①文献のリストは出現順に番号(カッコまたは上付き)を付ける、②著者名は First name に引き続いて first および mid-

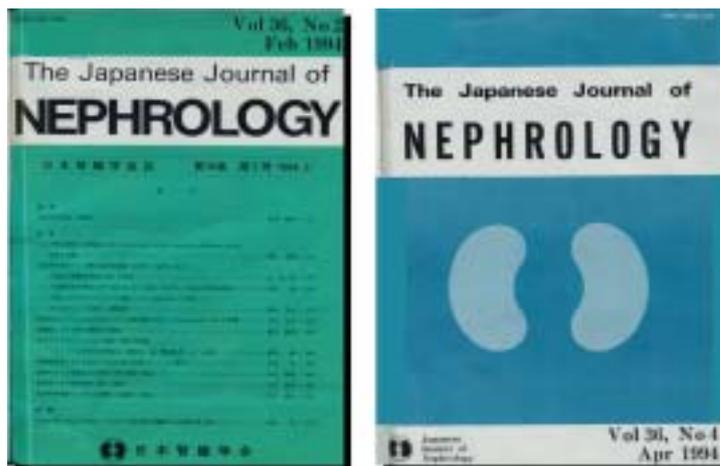


図 1 日本腎臓学会誌 第 36 巻の邦文号と英文号の表紙のデザイン

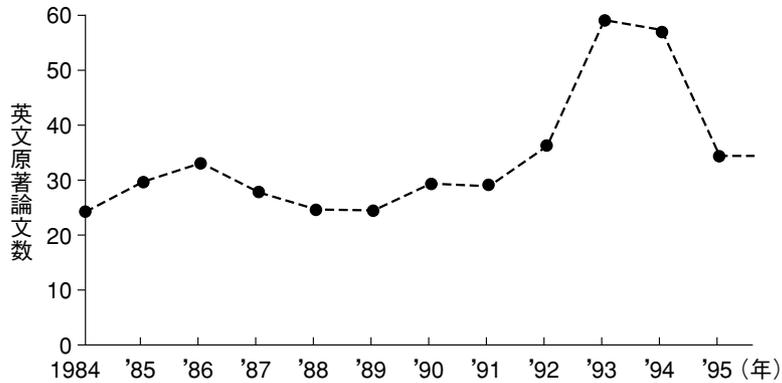


図 2 CEN 発行以前の英文原著論文数の年次推移

dle name を間隔なし、ピリオッドなしに記載する、③著者数 6 名までは全員列記するが、6 名を超えた場合、以後は et al とする、④著者名に続いて論文タイトルを記載する、⑤雑誌名はピリオッドを付けずに標準的な省略をする、⑥発行年；巻：ページ初め-終りの順に記載する。これらの変更に加え、出版社も東京医学社に変更した。

## 英文季刊誌 CEN 発刊の経緯

### 1. 英文誌の発行回数と経費

上述のように、原著論文を国際的に通用するものにしようとする努力が積み重ねられた。しかしながら、「The Japanese Journal of Nephrology」という誌名のもとでは日本国内だけで通用するローカルの雑誌という印象は払拭できず、論文に対する外国からのアクセス数にはどうしても限界がある。このため、邦文誌とは独立した英文誌を発行する必要がある。しかしながら、邦文誌年間 12 号に加えて、新たに独立した英文誌を発行するためには相当の出版経費がかかる。これをどう捻出するかが問題であった。そこで「The Japanese Journal of Nephrology」を年間 8 号発行し、残り 4 号は新しく独立した英文誌に充てるのが可能かどうか検討した。日本腎臓学会の定款を改めて見てみると、年間 12 号以上の学会誌を発行することが定められているが、2 種類の雑誌を合わせて年 12 号発行しても、この定款に抵触しないと解釈した。これによって、学会の雑誌発行の予算の範囲内で、4 号(季刊)の英文誌を発行することができると判断した。

このように、費用に関しては会員に余分の負担がかからないように配慮して、新たな英文誌の発行に踏み切った。後に CEN の発行に対して文部科学省科学研究費研究成果公開促進費を獲得することができ、出版の経費に対する会

員の負担はむしろかなり軽減することができた。

### 2. 雑誌名と編集方針

次に検討されたのは、どのような雑誌名にするかということであった。まず“Japanese Journal”という用語はローカルな雑誌の印象があり、国際性を考慮すると除外すべきであると考えた。一方、“Nephrology”という用語はすでに述べたように、日本腎臓学会が世界に先駆けて用いた用語であり、これを雑誌名に入れることは必須であると考えた。

英文誌の発行を計画していた 1995 年前後の頃、“Nephrology”という用語を含むタイトルの雑誌は 2 誌あった。一誌は「Journal of Nephrology」である。これは、現在ではインパクトファクターも高くなり国際的にも評価されているが、もともとはイタリア腎臓学会の機関誌であった。もう一誌は、当時はまだ発刊準備段階にあった「Nehrology」である。これは、現在は Asian-Pacific Society of Nephrology の機関誌となっているが、当初は Blackwell・Australia 社が商業誌として発刊を企画していたものである。筆者はたまたまこの雑誌の編集者の一人としてその立ち上げを手伝っていたが、「Nephrology」という雑誌名の採択に表立って反対するわけにもゆかず、大変残念な思いをした。

このように、最も欲しかった「Nephrology」という雑誌名を先取りされてしまったので、次善の選択として「Clinical and Experimental Nephrology」を雑誌名とすることにした。これは、腎臓学に関する基礎的研究から臨床研究にわたる分野の研究を幅広く取り上げようとする編集方針とも合致する。

この雑誌の編集方針として、まず国際性が重要であるが、それと並んで日本の腎臓学の独自性、特異性を示すことも必要である。馬杉腎炎をはじめとする実験腎炎とそれに関連する研究は世界に誇る研究である。また、長期人工透析をはじめとする慢性腎臓病の管理や治療に関する研究もわ

が国独自のものである。また、腎生理学をはじめとする基礎的研究も国際的な寄与をしている。これらの基礎研究から臨床研究を含む幅広い分野の論文が掲載されることを期待した。一方、国際性とやや方向が異なるが、わが国独特の論文形式として Case report がある。腎臓学に関連する多くの英文雑誌があるなかで、Case report を受け入れる雑誌は稀である。Case report といっても単なる症例の追加報告ではなく、学問的意義の高いものも少なくない。そこで CEN ではオリジナリティの高い Case report にも門戸を開くことにした。

以上のような編集方針のもとに、基本的な構成として、Review Articles, Original Articles, Case Reports の3区分を設け、Original Articles には Experimental Investigations と Clinical Investigations のサブディビジョンを設けた。

### 3. 出版社の選定

出版社の選定には国際性を考慮して、日本に支社を持つ欧米の出版社を対象とした。いろいろ検討した結果選んだのが Churchill Livingstone Japan 社であった。Churchill Livingstone 社は英国の出版社であり、医学関係の単行本の出版に定評があった。この出版社を選んだ大きな理由は、CEN 刊行の2年前に日本泌尿器科学会がその機関誌として「International Journal of Urology」をこの出版社から発行していたことである。日本泌尿器科学会の編集委員会の主導のもとに、編集から発行に至るシステムがよく整備されていることに加えて、雑誌のスタイル、デザインを含む仕上がりも素晴らしかった。このシステムを利用させていただくことで CEN の発行も円滑に行えるのではないかと考えた。

このようにして、CEN の第1巻第1号を「The Japanese Journal of Nephrology」と独立した雑誌として刊行することができた(図3)。CEN の第1巻第1号の原稿の一部は著者の了解を得て「The Japanese Journal of Nephrology」宛てに投稿された英文原稿を充てた。また、邦文で投稿された原稿を編集部で英訳して掲載させていただいた論文もあった。その後、CEN は季刊誌として順調な発行を続けた。しかしながら、残念なことに Churchill Livingstone Japan 社が2年後に日本から撤退することになった。

そこで新たに出版を担当していただく出版社を選定する必要に迫られた。このため、厳密な入札方式ではなく、見積書を付して応募してきた出版社のなかから、日本腎臓学会が調査のうえ選定するという方式で公募した。応募した

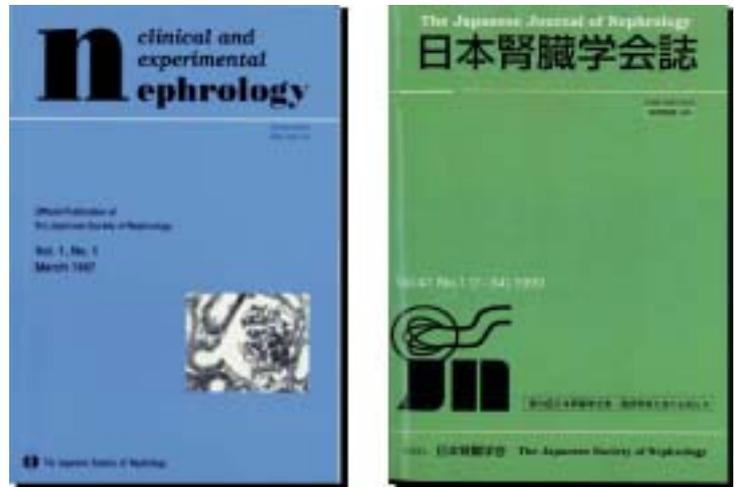


図3 CEN 第1巻第1号とデザインを新しくした日本腎臓学会誌の表紙

数社のなかから、出版社の実績、評価、出版費用の妥当性などを考慮して、最終的にはシュプリングー フェアラーク東京(現 シュプリングー東京)に決定した。Springer Verlag 社はドイツの伝統ある出版社で、Pflüger's Archives European Journal of Physiology (2009年現在458巻)、Naunyn Schmiedeberg's Archives of Pharmacology(同380巻)などの伝統的な医学雑誌の出版で有名である。個人的なことではあるが、筆者が前者の雑誌の Field Editor を1986年から1999年までの14年間務めていた経験からも、その編集システムや SpringerLink というオンラインシステムが完備されていることを熟知していたことも選定の判断材料になったことは否めない。幸い Churchill Livingstone Japan 社からの引き継ぎも円滑に行われ、CEN の刊行を順調に継続することができた。

### CEN の論文投稿数と掲載論文数の年次推移

CEN の論文投稿数と掲載論文数の年次推移を図4と表に示す。論文投稿数はしばらく60編台を低迷していたが、2004年以降は80編を超えて、最近ではさらに増加の傾向を示している。また海外からの投稿数も増え、2007年には47編、2008年には85編を数える。

高い質の論文を掲載するためには多くの投稿論文のなかから選択することが必要である。これまでの論文の採択率は60~80%と高いが、50%台以下になることが望まれる。

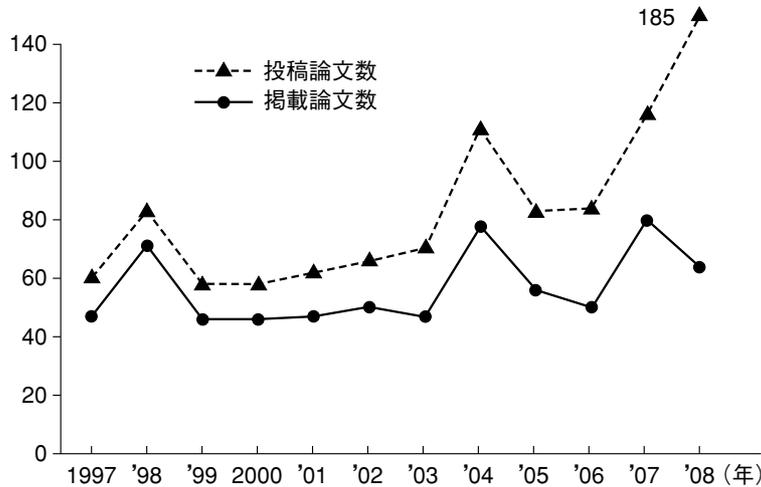


図 4 CEN の論文投稿数と掲載論文数の年次推移

### CEN の今後の発展のために

CEN は刊行 12 年を経て、ようやく国際的な評価を受けるためのスタートラインに立つことができた。今後さらにインパクトファクターの高い雑誌にするためには、できるだけ多くの論文が投稿され、優れた論文を選択する幅が広がることが大切である。また、論文を CEN に投稿する場合は、CEN の論文をできるだけ多く引用することを心がけたい。多くの優れた論文の投稿をもとに、できれば月刊誌として刊行することが望ましい。

出版に要する経費はかなり高く、会員の負担も大きい。優れた研究業績を発信することは、学会として最も重要な目的の一つである。また、多くの優れた論文の投稿を期待するためには投稿料を無料にする努力が必要であろう。

今後 CEN のインパクトファクターがさらに高くなり、質の高い研究成果が発信されるようになることを期待してやまない。

### おわりに

CEN 刊行の経緯について述べた。新しい独立した英文誌を発刊したことに伴う唯一の問題点として、これまで日本腎臓学会誌を購読していた多くの図書館で CEN を新しい

表 CEN の論文投稿数、掲載論文数および採択率の年次推移

巻	年度	投稿数	採択数	採択率(%)
Vol. 1	1997	60(9 <sup>*</sup> )	47(9 <sup>*</sup> )	78.3
Vol. 2	1998	83	71	85.5
Vol. 3	1999	58	46	79.3
Vol. 4	2000	58	46	79.3
Vol. 5	2001	62	47	75.8
Vol. 6	2002	66	50	75.8
Vol. 7	2003	70	47	67.1
Vol. 8	2004	111	78	70.3
Vol. 9	2005	83	56	67.5
Vol. 10	2006	84	50	59.5
Vol. 11	2007	116(47 <sup>§</sup> )	80(27 <sup>§</sup> )	69.0
Vol. 12	2008	185(85 <sup>§</sup> )	64(22 <sup>§</sup> )	34.6

\*The Japanese Journal of Nephrology への投稿から移行した論文数を示す。

§海外からの投稿論文数を示す。

雑誌として購入リストに加える配慮がなされていない可能性がある。しかしながら、今後のペーパーレス化の流れを考えれば、この問題はそれほど深刻なものではないと考えられる。

最後に、これまで CEN の刊行に協力していただいた編集幹事、編集委員会、日本腎臓学会事務局および出版社の編集担当者の方々に深謝致します。